龍燈伝説と閼伽井嶽 特集

関内裕人さんのはなし

いわきの中心に閼伽井嶽があったのでは

当社（NEXT情報はましん）の社報委員会の委員長をしていて、好きなことを少しやらせてもらおうと、閼伽井嶽を（今年の一月号の社報で）取りあげました。その時初めて、上野宅正住職に話を聞かせていただいて。研究者というよりは普通に参拝する一市民です。

資料として一番わかりやすいのは草野日出雄さんの『霊場・閼伽井嶽』です。石城山岳会の叔父もこの本を参考に、すたれてしまった参道に看板を立てたりしています。社報のなかに、叔父に作ってもらった閼伽井嶽登山ルートの地図も載せています。

有名なのは表参道（閼伽井嶽旧参道入口～赤井嶽薬師）と、わたしたちが歩く裏参道（好間の下ケ屋敷登山口～七曲り～赤井嶽薬師）。裏参道の登り口には行人沢があって、行者が身を清めてから裏参道を登ったようです。

社報では閼伽井嶽の地質や鉱物にもふれていますが、それは父からの受け売りです。閼伽井嶽はもともと天平時代に、源観上人が蔓延していた疫病を払うために、水石山の剣ヶ峯に薬師如来像を安置したのが始まりです。剣ヶ峯はとても急峻な所で落雷が多く、よく火事が起きたそうです。

わたしの曾祖父さんから父が聞いた話では、落雷で剣ヶ峯の草庵が燃えてしまい、薬師如来像を閼伽井嶽に移したそうです。父によると、あそこは鉄鉱石が採れ（周辺では古くから製鉄が行われ、たたら跡が残っている）、磁力を帯びた鉄鉱石がごろごろしているらしいです。国立科学博物館の方に聞くと、落雷が原因ではないかということでした。

閼伽井嶽は南西側が花崗岩、北西側が斑れい岩で、薬師堂の裏に境目があります。花崗岩のなかに白濁した水晶が含まれていて、参道などにも露出しています。明治時代の『赤井嶽志』に大須賀鈎軒が書いたものの写しがあって「永井、新田、軽井沢では水晶が見つかるが、赤井嶽ではまだ、わたしは見つけていない」と記されています。

昔のいろいろな本や絵を見ていると、いわきの絵のなかに閼伽井嶽は必ず出てきます。明治時代に三代目の広重の「日本地誌略図 従尼子橋阿伽井嶽遠望」もそうですね。調べれば調べるほど、いわきの中心に閼伽井嶽があった気がします。上野住職とも、いわきのランドマークと言っていいんじゃないか、という話になりました。

日々の本棚

特集「龍燈伝説と閼伽井嶽」のきっけなった絵本。医療創生大学客員教授の夏井芳徳さんから手渡され、ほんとうなら長久保赤水のふるさとの茨城県高萩市まで出かけ、赤水のことも取材したかったが、新型コロナのことがあって控えた。時期をみて、高萩に行きたい。

作者のときさきよし（時崎清）さん（69）は、地元・高萩市の歴史民俗資料館などで赤水が作った地図「改正日本輿地路程全図」を眺め、いわき地方の海上に記述された漢文に気づき、文字を追いながら、あるイメージが頭に浮かんできた。その後、詳しく内容を知りたくて、長久保赤水顕彰会の会員に現代文にしてもらい、多くの人に伝えたくて絵本での表現を模索した。

三十代後半から、仕事のかたわらに8ミリフィルムで映像を制作していた。もともと絵本にも関心があり、定年後は絵本づくりをしたいと考えていた。しかし龍燈の現象だけを追う絵本ではつまらない。想像力が広がるような抽象的な表現を考え出すのに、時間だけが過ぎてったという。

そして3・11が起き、何冊かの絵本を手がけたあと『りゅうのひかり』ができた。単純な線や丸で闇夜の海や山、光などを描き、言葉も最小限にとどめている。静寂でありながら気配が漂う世界がつくられていて、ラストがとてもいい。

閼伽井嶽の龍燈のことをまったく知らない人がこの絵本を読んだら、何を感じ思うのだろう。とときさきさんは、希望が持てるレクイエム、と絵本を言う。

『りゅうのひかり』
ときさき きよし 著
（長久保赤水顕彰会・発行）
1000円＋税

絵本のうしろには、夏井さんが「長久保赤水と閼伽井嶽の龍燈」と題して、自身の研究をまとめた原稿を寄せている。

赤水が閼伽井嶽の龍燈についての記述を残している「東北南部から近畿図」と「改正日本輿地路程全図」の二つの地図、紀行文『東奥紀行』、さらに書き残した文章をまとめた『赤水文章』のなかの「遊閼伽井嶽観龍燈記」のそれぞれ記述と読み下し文、現代文を示しながら、詳しく解説している。

夏井さんは、赤水が自分の目で閼伽井嶽の龍燈を初めて見たのは、延享二年（一七四五）十月二十九日と推察している。その日は月明かりのない日で、湯本温泉を訪れていた赤水は思い立ち、好間から七折坂を登って閼伽井嶽に行った。宿で食事をしたあと、ころ合いを見て燕石の上に座って眺めると、篝火ほどの大きさの龍燈が点々と連なり、次から次へと続き、見えたり隠れたりしたという。

ところで龍燈はいつから見えなくなったのだろう。それとも、ほんとうはいまも現れているのに、わたしたちの目には見えないだけなのだろうか。